最後の人（1924）

DER LETZTE MANN

メディア 映画
ジャンル ドラマ
製作国 ドイツ
色彩 B&W
時間 72分
初公開日 1926/01
公開情報 劇場公開

【解説】

独サイレント期を代表する演出と脚本の才が協力して、“キャメラを持って語れ”を合言葉に新たな映像表現を確立した画期的作品。主演のヤニングスの名声を否応無く高めた迫真の演技が見事だ。さる都会のホテルの厳かな制服に身を包んだ老ドアマン。その立派な立居振舞いはホテルの顔と言うべきものだったが、ある雨の夜、客の大荷物を抱え大汗をかき、ぐったり休んでいる所を支配人に目撃され、運命は一変する。何やらメモを取る支配人。やがて呼び出された老人は手洗所のボーイに転勤を命ぜられ愕然とする。通達の書類には“老齢を配慮して”と大書きされている（ここに初めて字幕的画面が入り、彼が溢れさす涙にその文字が曇る！）。通勤時もかっちり着込んだ制服のため、近所でも将軍のごとき尊敬を集めていた彼だが、平服では誰も振り向いてくれず、むしろ嘲りの微笑みを浮かべるだろう。それが判っているから、彼はロッカーの制服をこっそり持ち出す。同居している姪の結婚式で、彼は制服に身を固めて祝宴に臨み、美酒にしこたま酔って幸福の絶頂に浸った（老人の酸酊、あるいは精神の昂揚を、二重露光のキャメラが主観的に物語る）。が、翌日からは、また白衣の手洗所のボーイ。たまたま、その姿を近所の奥さんに見つかって、この事実はあっという間にアパート中に広まる（その噂の伝達もまさに映画的に表現）。徹底的にうちのめされ、なじられながらする仕事にも身が入らず、ぼんやり手洗いの片隅の小椅子にうずくまる老人だったが……。ここでようやく字幕タイトル。これでは悲惨すぎるので一つの挿話を加えようと製作側が思ったのか、ちょっと蛇足なエピソードが入ってエンド・マークとなる。ドイツ人の制服フェティシズムの核心を衝いた、強烈な小市民劇。

【クレジット】

監督	Ｆ・Ｗ・ムルナウ	F.W. Murnau
脚本	カール・マイヤー	Carl Mayer
撮影	カール・フロイント	Karl Freund
出演	エミール・ヤニングス	Emil Jannings
	マリー・デルシャフト	Maly Delshaft
	マックス・ヒラー	
	エミリー・クルツ	
	ハンス・ウンターキルヒェン	

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2026 Stingray. All Rights Reserved.